

もんじゅ ナトリウムをアト抜き取れず

原子力機構 新たな機器開発へ

日本原子力研究開発機構が高速増殖原型炉もんじゅ（敦賀市、廃炉作業中）の原子炉容器や配管などに保有している千六百六十トンの冷却材ナトリウムのうち、計約七十七トンは既存設備で抜き取れないことが二十三日、機構への取材で分かった。機構は新たに機器を開発して抜き取る方針だが、一部は配管や機器の底部に残留するといふ。

機構はこれまで、原子炉容器から抜き取れないナトリウムが一定程度あることは説明していたが、もんじゅ

質を含む一次系ナトリウムが、放射性物質を含まない約九百五十トンのうち約五十トンの二次系は約七百五十五トンの



もんじゅ プルトニウム・ウラン混合酸化物(MOX)燃料を使い、発電しながら消費した以上のプルトニウムを生み出す原子炉として1994年に初臨界。国の核燃料サイクル政策の中核と位置づけられたが、95年のナトリウム漏れ事故、2010

のうち約二十七トンは、それぞれ既存設備では抜き取れないと試算した。ナトリウムは輸送用タンクに入れて、二〇三三年度から始まる廃炉作業の第二段階で施設外に搬出する。

※()内は既存設備で抜き取れないナトリウムの量

新機器でも取り切れずに残留したものは、ナトリウム関連機器の解体を進める第三段階の中で処分方法を検討するといふ。ナトリウム関連機器の解体は国内で経験がなく、技術開発が今後の課題となる。

機構は、第一段階の主な作業である使用済み核燃料の取り出しが終わる二三年末までに、ナトリウムの搬出方法や期限などを決める方針。もんじゅと同様にナトリウムを扱う高速炉を持つ英国とフランスの経験を参考にするといふ。

ナトリウムは空気や水に触れると激しく燃える性質があり、もんじゅでは一九九五年に二次系配管から漏れて火災事故が起きた。

